



明遠13  
號1293  
卷1-2

冊  
三十九年一月二十九日  
水谷弓彦氏  
訂贈



神風や倭寇の内外は國分終る豊

饒振の他國も勝て一國海成懐は

山城負出乃府十五ヶ所も立傳一

粒萬倍は國も多舟路は用

連なり中も遠き事なれば静なり



民家貳千余新城築日榮一田畑  
籬泔水之唯萬民豐樂茂親友  
絃之室之信奸逆賊也邑紳右衛門  
之奴者下賄者成之之才智察明  
亦致身領主茂並治經之百姓張  
利刃既下領主乃所家斷絕也  
と其終と母了道此所罰  
道既道南之一家類族刑罪  
不遂悔り也後車此戒めなり  
信曲農工み奸謀亦後人の鏡  
如茂と書所也之可恐之  
可怯乃根元也

寶永尾歲

今日今日

野色好曲録卷壹

目錄

- 一 伊勢の國之事
- 一 松平越中守殿之事
- 一 越中守定重上藤堂家及鉾指事
- 一 野村伴右衛門祭事之事
- 一 野色兵助奉召之下代奉公之事
- 一 中村去助奉召下代奉公之事
- 一 中村伴右衛門納戸改被申付事
- 一 野色伴右衛門加増近習例用人立身之事
- 一 野村益為出頭五百石奉公之事

野色妍曲錄卷之一

伊勢志國之事

元伊勢志國之諸列子。綿連去地別之福分。分是近  
 江伊賀之志麻紀伊志德尾張之隣。少之七ヶ國  
 不相並。八ヶ國境。志國此程。之。浦方。私路。之。日本  
 國中。小通路。能。自由。此。元。南北。三十里。余。東西。二  
 十里。或。之。十五里。六里。山。之。分。一。平陸。之。分。志。二。ヶ。分。  
 田地。厚。く。真。去。少。分。五。穀。地。實。り。上。分。地。田。畑。水。り。炭  
 薪。之。山。近。く。一。分。自。由。海。色。ハ。去。産。多。く。酒。之。大  
 坂。伊。丹。ノ。増。ま。り。其。不。去。綿。若。糸。緞。子。整。紙。草  
 沖。草。澤。山。ノ。名。由。ハ。魚。乾。ハ。幸。々。石。蛤。白。魚。新。富。田  
 海。老。赤。頭。質。之。物。轉。別。係。此。枕。簾。津。志。雜。喉。録。鏡

松坂平尾北釣鉾岩子此郷去昌村松尾小鯛鱒山田  
浦乃鯉園中今克後多法別子孫れを於國あり  
まゝ宮川と東十二郷を古來守護不入是地少  
く神領あり田在松坂白子拾八萬石を孫是志入紐  
めより紀而領也亦津久后拾八万石、津孫堂和泉  
古領あり龜山領五万石、桑名領、松尾神戶領、武万  
石、薦野是方なり小幡より射和島相領山田小林四  
日市石業師在野坂下、所代宿領なり也、大田少くは福  
比京郊大坂より近く、關東海邊九又自中、就中、桑名  
ハ任將、桑名、少く、東海道志、舟路の衝なり、亦、國中  
此園所、初、所、ゆ、咽首、乃、比、なり、以、能、昌、此、地、あり、事  
野、是、律、古、島、堂、志、桑、者、り、奸、曲、古、今、以、發、之、惡、人、分、り

松平越中守定重之事

桑名志城主松平越中守定重は東照宮の所縁家  
少く、所、母、公、傳、通、院、殿、志、所、同、腹、乃、所、血、並、名、別、の、家  
久松依後守此子志節あり以定重ハ松平曾此人あり  
良將莫志志、量と、之、と、平均の代あり、且、志、我、  
人、友、多、く、唯、我、り、信、志、人、此、極、り、云、と、母、武、勇、運、送、人  
あり、と、大、丈、丈、と、可、養、人、あり、相、祖、名、松、平、因、懐、古、室、孫  
あり、舎、丹、西、人、三、節、殿、後大藏  
太補、末、子、長、福、松平隱岐守  
東照宮  
三、向、より、所、對、面、あり、長、福、志、所、懐、殊、外、所、寵、愛、誠、の  
中、と、是、乃、初、石、西、志、郷、を、端、り、母、公、兄、弟、一、所、よ、成、長、有  
り、因、懐、古、殿、所、取、立、有、り、端、り、松、平、越、中、守、定、行、其、端  
子、相、續、く、越、中、守、定、綱、四、景、少、く、東、照、宮、此、甥、大、坂

陣より軍功有り寛永十二年隠岐守を任蒙志松山城  
拾万石賜り越中守に拾万石奉名代賜り高橋津吉  
定良當主越中守定重三代奉名志松山城主少しく新  
田比多く御縁家少しく名別の家あり殊に定重を  
大量此人少しく耳目より輕賈人志拙よ云分幣も  
亦似る人少あり一生此内也く亦此奉小出合掌人  
分り其奉名疑の志松公は法之く一筋あり方相心此信  
り此類人ありけ故よ野色律古遺も又智察の信好志  
人終よ氣と取解く出頭出候と女悪逆此見付ると  
即時り刑罰同敷侍五拾千人死罪に帝付其惡量秀  
若人あり惜く那定重一生涯志同天下靜謐故埋ま  
く人並くく流り流人もく七の時を至國の人こ

越中守定重上藤堂家及群相事

奉名志松津津の城主藤堂和泉守と群相よ及く既  
よ天下此亂逆と此一人と此子細き友老大學頭高次  
臣若かり嫡子和泉守高之任家督相續た男依後守  
高通内方々五万石久居新地此取立は之居領南伊豫の  
見所村是百姓下節奉云鐘持中間津堂家よ云仕事り  
彼う兄弟奉名此家中久松五万石方よ皆侍奉云云  
春涼取取り陰指左下よゆりく兄弟叔よ奉名よ事り  
對面よ金記と此内よ入りよ下節放り刀指さる死と思  
ひ多し編是此著事本城入り本寺為人相安若此  
何者と云友貴依後守百姓よ云即時よ候と云  
傳りく宰よ事く越中守殿よ祈事と定重大くよ五後



志く在りて常く隣里に居候我領方以目此下より心付  
川守の子若かりし其志見ありし其地紀と即時より首打  
と埜清の多桶入り入至久居友堂佐守方の世守附  
屋ケ請取より其地越とつと自ら罷取淨り  
は方後居大學守居ケ大化は立獲て越中守仕方毎法  
河原キ子若かりし和泉守領方は其地より佐守  
小身故に相りあかた其地領百姓見合以解死令  
三と磔り殺るに多りと其地役人をわきと云長川志  
下池田中ノ西村志間の幸名領の百姓志願草薙し出さ  
と挿へて武ヤク川原堤に磔を正しり越中守に其地  
は幸以守居る大學領は所成事と云る也と云るは津  
領志百姓に磔り殺るると頼りよ下志と津領山一

色村

藤堂仁右衛門  
領地ナリ

志百姓武人其地挿へて町屋川原志端り磔

よ惣より従是両方大化より不和あり大學願愈り願  
けは幸あり和泉志と左國の所成以賜り國乞は次々  
幸名志城と踏潰しと津り以多天下此御下知以法  
屋一少後引捨るに如くはと移者愈り越中守是と  
少備れと向しや彼を大身故よ武常遠以云るの我にお  
心より不足し思へと女百目分り孫堂津志城と端  
其是北よ幸名領よ解り幸しと其人不許通志可  
赤宗とく俄に和泉志備合城の橋と善法と玉宗と懸橋  
志く少後不許通く用意有り既よ及礼と其天下此  
御沙法と有利酒井雅采頭と其家此親親故子扱子入給ひ  
是北よ和泉志と半并通仙院志備とて双方津事と相

鎮守は節の扱へ酒井雅元頼朝志す間して若輩友  
は本と通る時少く本城の羽根搦込引矢倉と志持間  
と用く身と此事越中守殿は中島成徳相人相寄り  
然る上ハ亦藤堂當地性来此節鎗と仕与此弦とを向  
さる身と中島中島城の扱双方向は事の扱のしは  
幸利其年藤堂より和泉守向り園札と打ては指  
主と和泉守殿治名家中此者と皆体定志是越中守  
殿章名此町中よ下知今使向り高皆可遊之北頭は向り  
有りと編み北下人太の治と和泉守殿夜石の上と  
つひり市よ止宿去に中免く如り常法不遊よ向り道  
中よ下の首領章名領の武士とり見たり一寸も道と用と  
中よ後と志是中島越中守殿より若輩志是の前中よ

是道は明記中よと中く少く不負人我徒計りし何れ  
唯一方究竟の武士あり一筋分敷人故よ少し不徒有  
し人あり或来よ何れも性来此節越中守殿章名  
是中よと暇と後を致し甲府殿所通駕籠脇と志  
つと起ても不答常相仍合的若来若出思ひ高考と  
甲府様所通と中時目次明記して甲府殿は我迎付よ非  
ら江と行と向く随分と志是有り一生は上よ此人  
後よ岡口替さる一筋り様是る人あり何れも志是  
多く我の思故徒志人ありけ故り地色様七島利奈よ  
高時節は治と出願しと家中一枚り仕付て千三百  
五十石より知行とあり家老職よ成り利其身下後よ  
上志取立と志徒知く我子兵助は所寄りしと家

督と奪ぬ魚紀志誅畧奸謀云徳因断親也予提婆  
孔子下盗 國り望人家り氣位下に倭人絶り分  
とのるり

野邑津右衛門登瑞し事

まより伊吹龜山領北志山方り野登村と云里有り  
け村は随方輕地百姓漸くは田地七八石代々持き百姓  
は男子五人女子二人持く子供浅生立敷とく以て貧  
困は成男は子供作業とく其日純後世漸くは心三  
男純六物ハ耕作もせ次富えは居くまは日永村志  
一向宗の寺觀心寺も寺ま云人の所り廿二三宗もて是  
當りたり不思候の男もくは師も書習ひも白く大師流  
の能業ハ兼用は通達とく何極り新業積り陸と達志

まよ小孝向もあ利寺とて料理は心魚類精進とくは  
通達とく如何成り人交り及智各々是あり殊不之去  
めく又天八寸此長小籠と作り亦力量是あり相撲も好  
事迎也此園取り穢り稀者あり諸人武士よりるまこと  
進むる名助云小ハ向篇武士は成り我帯く心は大願  
ありと聲云ハ大悪人と云まこと成我一生此中金銀自せり  
志く知りま向けハ酒者よあ死者極多死よまはハ何  
相意悪死あるともくくくく唯生涯の月一度ハ自由  
仕方死ハありと知り酒と吾小料理好事寺成不自  
由如りと穿人ハて出書利吏とらと方と者以て少死の  
左方善結志結履亦志志高事成り安樂ハ後世  
と何方とくも随分重寶の男とくは終り代奉云以是

多津領志那奉引柳田徳と物方より代より北西  
志事と方納不爲器捌此大起り功者なり役所とも  
支吾者とも養事所の徳ともは徳と物自實の人故よ  
私由我任志働り死不叶之物も漸くは二十歳より成  
俗に也くは要よをい給後より代を云立身を不可成と見  
限暇取戻り候へり出せり

野邑兵助兼名と下代奉公事

兼名領那奉引の支配り代官格武人有り代官志より代  
此下亦下代と云役有り奉代より利も下役有り之物此  
下代は奉公り候り兼名領あり候官友奉公り  
漸くは兼名奉公り代官志より代を立と納家より村こよ  
出所没後より其兼名の皆と出所兵物仕合はり代より出

よ不足しと下代志同より兼名用務進者有故よ搦り出れ  
と村を兼名石北所と出り北西納兼名事は津領より  
徳受者利庭帳より志兼名奉公り米代并ゆよ百姓在  
庭の上より陣の帳面より附と陣所米代志兼名進庭の間  
り出り是を百俵持り奉公り候り七八俵免り候り  
物方り志進を代官或は志兼名其日此酒者又は代其の  
徳方より仕有り兼名と云物持り候り是と集の候り徳は  
と志兼名と名以付り其兼名納不忠也りよ凡三百  
俵程兼名のかと納所より立起大比り首尾徳徳役人兵  
助と養と又是人あり所為被群の所重寶是まゝの  
代より仕方と名名と兵助通りよ兼名可仕と兵助ハ  
所分無敬志徳役人とも則り代役より候り後取内意ハ

凡欲隠をよむ大款意人をも小款の目より懸伏逆順に  
恐畏畏有りは前より高定所とも野色兵物文智  
ありと所為は能人有りとは皆目以てをうき所行り如き

野色兵物臺本方吟味後所料理之事

去程より古今往來と有り大傳人の西極列發して好云  
令色ありと追従成り物有り兵物に立身の宜有之なり  
家中此諸役人中より勿論少く目立程法侍中にも常こ  
見舞日事以てお細く普請木橋に方以ても是より料理と  
仕り家中此の外重寶人と云々く彼方け方の立入者  
よ成て或時高定人考合評定の節より所臺所より入  
用疑者殊り酒夥者入目大坂指百餘元の入りあり  
又以意外有り其外所料理方萬端同袋多し吟味

役法新設より付可成り極り多し家中小切米蔵りの  
内より人撰りより淑分は時口より野色兵物に從ひ如き  
兵部加増十俵部合二十俵三人杖指法以下僕を人  
付人より揚り臺所意吟味役者人役より立身仕り兵物  
宜初の立身役有りは新設よ成りと諸事よ彼色吟味と  
懸り中よ酒指百元上元入りは指法不殘拂物に出さ  
臺本家中より入札所並版ありと配り兵物氣代付より  
一厨に總あり金銀の志也打割と薪小を命りとり打割  
と尺取時酒五七拜有り平殘五拜三拜元殘の有皆  
集りて三四十指程出さるは後酒と臺と入の指薪よ  
如り入札止み事と臺を月此入目百元余は酒代指三十  
指計より高定所諸色皆あり故より所臺所意諸勤

定例なり分一あり相細不備不思伏志野村と家中  
の辨判と如り是迄交越中守殿とす目見不仕者  
也亦常に越中守殿上戸あり料理好きあり吟味有  
熟た結梅から料理あり勿きと毎仕方塩梅も不  
入新系此料理人呼出と料理さる向くは氣入者一  
人分なく法方料理人或る毎日は義身基所強  
新系有り付てハ晒出熟何道より此究仍之料理合  
皆毎日く習うと難哉千萬なりは基所頭は助  
死亦用人死と死のヤとるハ私所料理仕指すや友方  
死上と然ハ云助侍り又よと夕所膳志料理も是と  
志中料理ハ随方重記古風ハ結梅仕立如りなり  
云助り仕立方活活登下賤合熟卒忽の料理吊梅赤

味噌仕立鶏此ゆり鶏鶏の赤味噌吸物ケ物の類計後  
よ是と不右と物計色と輕記料理亦同小は銀料理も  
有り塩梅と云仕方と云大さよハ振塩入所酒は右と  
定こよ兵助も御次より殿意とる物と喰酒も同様と  
て醉も御同常より御吸物意御好こんどきると自分の  
思ふ物も輕記吸物と酒と酒は酔て居るうら自分ハ醉  
場よ何ぞ吸物と塩仕立小酢或る或る塩辛以云附  
吸物仕立蛤此湯煮煮し是計しと仕立色と人のせよ  
事尚在籍意能悉く由余よ入多ハ料理方ハ誰人  
候り二管仕方随方能くと所尋こは時ハ新役の吟味  
彼野邑兵助とア着此よりハ内珠の不氣入扱利登此  
男所り物仕立方能能記と見右基所頭より付と

多新加百石錫目見給給人の役令たり野是株  
右馬と改立身政事は度料理方株右馬は常侍  
故に株は不静なり萬事治り所物入る程なり所  
臺所三方一と相渡役役人も大なる感心はて株右馬  
を御重寶之者ことと群判なり

野是株右馬納戸役事付事

越中守殿に作ら近年臺不方混雜不直臺所は野  
是株右馬のと静なり昔り小納戸役は事付亦役と  
上りり或時は所京府之節書院より所右同はを  
釘隠しと毎株の不量りて見苦し急は十日の内部  
仕習はると此事とて諸役人右馬は難儀大なる所  
有り右馬の内京の京細工なり今京都へも移り急

の用は難儀の所なりと申す申す申す申す申す申す  
とも難儀は事大なる難儀の群なり時野是株右馬  
進出て是は只今より者所難事所様徳の難儀計私急  
は五日此間より新事可仕とやきり法役人右馬は  
遠お細る難儀と急なり株右馬昔やととと細る糊  
と取寄難儀交合て何り茶と合せて釘隠しともよぬり  
其上は少き板の箱を隠しに金又日目に難儀と申す事  
所は跡を和らむる木綿をてと申す事と申す事  
時より不殘唯今新事仕なりと申す事と申す事  
起不我と申す事と申す事と申す事と申す事  
より警記供と株右馬を重寶分取者や有利は諸事  
は難事なりと申す事と申す事と申す事と申す事

よ成り家中の徳人茂物有り何様不思儀の者有りと登  
事明り一物有之方男故り徳人是付合能かりり  
越中守殿思召も何れ聰明の法没所共成也是年右  
邊下仕直り成魚紀との内心有り聖年所眺めて案  
名よ所立城所産の築山泉水分と普徳有之時所  
城南北方水門の入口は是沙入の要より分分大石有  
以石と引揚高亭庭よ居分一と此事故り大勢人亦  
是り普徳有之裁判と舟催合高城立く繩成可  
懸程よ如く防之也也一と一と細あり如く是年一沙  
指事門と云叶海と沼と埋と亦城出く繩成懸合記  
程り如りて是沙指有る相成而働成り城成り越中  
守殿殊古馬と云く是是付り引揚と此事明り奉畏

と一月見多所成り申付中用取寄酒屋是後大桶  
成枝とく扱波石成城是り潮と繩と懸成り如り  
取と潮指乘り殊古馬と公得きりとく彼大桶と石此  
上より如く是等暫時是間沙と防築其用よ等細十  
分よ懸也一と一と彼桶を扱取細と十筋計懸起く舟  
陸より人亦成増一とゆり揚りよ沙とて取と扱上り河の  
造作と成り是等潮とら下り引揚て所庭よ居一と越中  
守殿大記よ扱揚りて殊古馬と云く是程の事是よ入出類  
日と一と増あり

野是殊古馬の加増逆習側用人立身之事

越中守殿思召是殿と殊古馬と下然り取之文智可  
よ指是物每扱り是能者一五指石加増百五指石没科指



人技物と宛以勘定頭より申付へこと周知の事なり  
近習頭辨代の者石田藤吉馬とて百石程石取地有能人  
成りりるがけ時を世に小御諫と申す家私後目より非諫  
言かと申す海に近頃不習事より此の底何とも合點の  
ハ不忠言より此の事上は唯御為より野色殊吉馬の事成り  
利奈千石人より儲まり者より此の底何とも合點の  
事よりりる處多し勘定頭の事ハ御儲り方根元此事よ  
り金限急出入有之事大いに申す存心より御儲り頭  
より指置後事公底と見極めし是御後可なり成り申す  
御極を急事なりとて別件吉馬の事五拾石所加増貯蓄  
百石石より近習頭側用人石田藤吉馬の同役より申付  
きり職より物者なり此所より申すは是は勘定頭ハ

石田藤吉馬のうさへ申すと申す大に立獲りし時首有  
らハ終て申して仕伏金此と思ひ申すより亦常々石田野  
色大に不わたり野色を大信好の利奈者石田の身  
の上あやう此物なり或時越中守殿城乃底花相り出流  
ひく秋此室中蒲萄店の下より酒亭酒具の上より蒲  
萄一ゆさりと此来後と申す石田藤吉馬の即時よりきて蒲  
萄一房ち此り熟しきりや申心元一粒ち此りて喰ふて  
見く指上きり越中守殿きとくり公付を心と思ひ  
暫時有りしと申す乞流ふ此時を野色殊吉馬の立と終  
云の事と思ひしを房ち此りきり別より一房ち此り日此成  
房武つ持出きり越中守殿此を也熟しきりや喰ふ見  
よと有りきり一房此持あり一粒喰ひしと脇に遺りち此り



邑并古馬の小村に設け申付り以て并古馬の長高く力量  
有り勲術及達者以り人建スツヤカして即時に駈附く其初茶  
碗は水一盃入ると子持を其意にむくくと入妙有り  
孫古馬殿今此傷に此後方一版に事を見ゆ同役の  
事如く故り以所と来り事と上使と討提る事あり  
今も道々不も所と事とや小切後此後可後半但し我  
人とも不働さ事此跡しては是きれてん今も咽加り物  
あり同役を縁水一口命と見んと持系と事と云小條志  
馬も備茂存ひり那并古馬の討討く可達本と云ふ故に  
先逃不よ逃げむと見ゆと事人討討く跡明の如く事  
三行り以りさ所と水一口可や信と少く公此後ま時あり  
と押を彼茶碗に面り打付事利あり取眼よ入るいと事と

即時に押めん事生捕よ致しり以て名と事越中守殿大  
起し機場よ并古馬の才覚計よありん去勇きり事  
者那りと何の遠き事も以り石田條古馬切腹申付り石  
田知行百五拾石并古馬の加増よ賜りて二百石よ成り  
額側用人を人及よ成り其上よ勘定額兼役よ事  
附議よ初日の出向とて野邑并古馬先定知り石田の奸  
曲小仕伏まり倭奸不取り大悪人越中守殿の事及り此  
後小成りたり

野邑益為出頭五百石被下事

兵書よ明よ害と向者事可防固よ為害者ハ不可防  
大の詰万也事毎業よ通用と事一辟云事虎狼の猛も  
防よ弓鉄炮有りり事此記ハ鎗太刀有り如何相も可防

瓶裏妖怪の姿を不見得たまた人成害防り世も  
何事もら次信人奸人の瓶の正しく内競うと損之成別者  
と不お叶さくも野色非古馬を信奸は双の者よと石田條  
右馬成仕前減云乃以後三百名は成り勘定頭と云く  
御近習頭側用人は成り出頭限りなく業名は家中やうに  
朝日乃出向うくこ越中守殿御茶向キ非古馬のりくやうに  
時成相叶す極有り其上常く御酒の御おき出乾御夜  
食は御相伴も出乾大上戸各利着端も氣も入是を偏も  
人相氣不思儀志出頭然りい非古馬の如所如る事もや  
近年白木綿志裕乃胸當りく是冬明り斤時も離  
くは先見方不臣家中不残不蓄く事非古馬の成用有り  
くは隠れ或時曼の夕暮涼夜く様是端も越中守殿出

箱の酒盤室中御如意者とも大勢あり酒具は皆相傳り不  
思儀有り事ハ非古馬の復冬分り小子供の極も胸當り  
り付成り片時も不離人も不見不思儀と云く越中守殿  
世終見尋らぬと御意那り是ハ迷惑と稱退はる御如  
大勢取は懸乾非古馬の立く亦る小御猪子の方ハ不逃所  
白洲是方ハ走りり酒具の上り皆く走りはる事非古  
當成取乾非古馬の迷惑くと云用は日終と云用く後  
次御如死面く御前御慰は出せり胸當り裏り大文字  
て私成代官志十俵は或人技持足控同志是者殿極極  
目如めく三百名は下結構は相勅は依立身公座り不  
可忘却至夜所奉云所為大事は可お勅立身り志く  
身は著りけえ年成志終り我心は可覚戒如初と書

て野邑紳古馬の卜と血判を押し越中守殿大死に感心  
志す誠は貞信あり忠節あり古今に於て律儀成る者不  
可有迫頂感一入きり心持候りて志を志か犯人故り所  
言は叶候と取寄て今日より五百石取寄紳古馬の友と由  
自筆に狗懸り書記に加増と云下相しく奸謀の猪道  
多し紳古馬主人の氣質と能知り此たふと仕まり借  
借ら奴等の上事を候ともまらぬ程実義にお見えぬ  
大奸人有り五百石有り候りては以後益出頭迄比目さ後  
志紀事あり

野邑奸曲録卷之終

野邑奸曲録卷二

目録

- 一 野邑紳古馬の奢侈之事
- 一 野村紳古馬の子供し度
- 一 野邑御内證取入大奉行役頼之事  
并久徳隼人諫言之事
- 一 野邑奸謀久徳隼人と追退事
- 一 久徳隼人執上之度野村紳古馬の志度
- 一 久徳隼人切腹之事
- 一 野邑紳古馬の大奉行成事
- 一 野村紳古馬の奢り度

一 律古也の百姓に居る者金銀取与事  
一 所中が錢旅人頭付物之支

野邑奸曲録卷之二

野邑律古也の奢侈之事

野邑律古也の計畧思不圖よ叶の五百石より暫時  
有用人没し年中付款り下代志男用人も可成上は迎  
頂子物は家中皆濫代一老老吉村亦古也此人ハ万妻不構  
次より徳民部之松五帝在徳服部半花三人家老有り  
用人ハ之徳集人研久書式部研野邑律古也五百石三人ハ  
之物より取上り出頭常り所志不去相勤り天竺  
と御守入敷り古今世教志利發有り如何如事也  
相調不律古也の公庭も思ぬハ所方在方御指も高定  
方不残大奉り吉人改新役も加り家老並小僧紀立  
身より亦新田加多り拾二万石納り皆公律古

武十万俵有

よき事ありとあり内ふよ大死する事のみ有らば世昔成  
忘れ多し人歌加物の奸曲なり人哉非し其上家初葉と  
跡先明よ奢を可極は是悟猪子方初めは馬小  
極しも不成然れども朝夕料理は好むと者ハ幸名  
地浦志魚乾尾列の浦津浦乃奥物酒ハ大坂伊丹  
の池諸名ハ迫馬大津と云々朝夕々々月並ハ成  
り大果報と見西其身を有放よ家中乃藝士と懐  
朝夕振舞毎日々入禮よとるも幸名中よて又智  
有る人計と集めと我下小付むと云角り内院  
近別恐よと云ハ原川法華寺馬田原寺門行色貞  
右馬ふと國陸の者ふれ九珠ふ不入禮夕り家申よて  
家老用人番頭此内り辨古志よと後く人義形表没

馬好きと云く或是方り家を多野田活生文中小姓  
四人秘毛寺人料理人三人赤羽の者五人年廻仲間武  
指人計有り亦同證方是女大指あり好色人奴小毒  
教人京大坂北白人山田古帝の婦若常と通ハ小女  
と移遊奢大難答むり人も似く中一越中守殿の所  
お白故り為端平押志十分此首尾分判

野色辨古馬の子供之事

野色辨古馬の迫頂三百石是時己本書多離別  
越中守殿志中をり昔我喜國方小有り代中内院  
又取也いよ彼是我の書り中下志と及中終く和  
順り志と外の事不出座仕ら男子以本書の子明と  
披露しと是ハ越中守殿落胤と披露はる越中守殿

是有り律儀のそと定まり在れと思はく庭衣と云ふ  
梅所の梅枝と添くそと歩利何う奸謀至極の者なり者  
即時不殺者赤飯餅酒肴以用まじく家中に死り  
所は死り家内夜儀の振存とてそと中編りの敷板  
よと世倅所致洋領是に所成流懐胎乃所致金と書  
よと中編板の由子也と中編多信奸と働く難を越中  
古殿律儀成り人よそそ方胸當此心居誠と思ひ出ん  
出頭しそと朝日此出所致其は後用入没六百石を存  
とも中く善端物入知りは是不緒の才も不及大起り  
不足よとと家中此賂と北所方此非方しそと利取極  
極の二面借金等借りぬととと少しも苦勞もせぬ万  
部目と向しと律儀也なり

野邑律儀古事の汁内院に取入大奉所後致事

并久徳軍人隸云之也

越中守殿所借り方所借金甚高様り所致成りて  
万端お細急しり唯明習はお終りてこは昔律儀也  
内縁真方よりそと取の書も真方所出入故よ此縁成り  
中まはる角所勘定元々及所奉り在方奉り一と小兼  
没しそと所仕是頃路しそと中とと此因袋振目そと  
殿様表由為よ成り仕方他回り利金銀借目よ及所領内  
よくりと金船自坐小取割成り拾々奉り意内よ  
は怪り成り中編律儀也と人よ此後身たりし私義也  
之身貪然死者小比とと殿様御目利とと所取是此上ハ  
昼夜所時及忠厚思ハ不奉忘少不指此成事皆よ



故々と教の各飛成角も所為能相舟と云々御花を二市  
四方此女中達には事以中律古馬の女房方より女中方  
色々善法に入候へども其より女中方此絹布巻物系は  
道具法事入用律古馬の事候へども半方此正服にて相可  
中彼是中少て利方相曲有之候へども言由あり是故  
了と中傳へ候へ女心より圓御方此女中中出入と表  
方或は呉服屋にて相廻り候へども言由あり是れ女中  
律古馬の事候へども心持ありと事百も是物も四程自  
或は指の物も三四女中を頼り候へども色も此より送  
り候へども女中方大悦にて候へども今迄いふごとく大化  
相付候へども野色及此少候へども半方此より付候へども  
了と養立候へども圓御方事候へども律古馬の事候へども  
越中

中殿に少る何れも裁は律古馬の事候へども中付とて油  
小袖の小事候へども取候へどもは位は相違候へども此深  
此文は律古馬の事候へども是れ見候へども是れ所石料  
物ありと大極上とて見増程の相違候へども半方此正  
上り表方と引合見候へども大化と事候へども公庭律古  
ハ萬端何れも小大と事候へども遠の有り律古馬の事  
此の有り者候へども此は此大奉り新役ありと事候へ  
是れ候へども此は此大奉り新役ありと事候へども此は  
是れ候へども此は此大奉り新役ありと事候へども此は  
不出久松五節候へども此は此大奉り新役ありと事候へ  
若那り何れも此は此大奉り新役ありと事候へども此は  
付の如く用久徳集人密に中付候へども此は此大奉り

子安侍所出勅定元ノ役迄幸人ノ下ニ在侍所此由沙汰以  
之介不可然私同役ニ後移シテ中ト可思思石式ニ所ハ  
以神文ニ氣世俾不見所子討ニ過テ中ハ今ニ偏執ト  
言フ事之ハ先律古ノ事ニ諸方人ノ務ト各得トテ貴一  
文字此ノ義有リ然モ少ク事業動ニ通達物ノ様ヲ希代  
乃智者諸藝法所方天晴次ノ武士ト以テ元ノ事ニ貪欲  
より少取立唯今五百石此所究行ト以テ彼者ノ家内若  
暮ノ中ノ吉村又古徳ノ事ト及中物ト以テハ勿論表方軍役  
人馬ニ不相應ト持法基所方奢リ果多キ事ト也京大坂  
乃所也有リ妾女大株有リ亦承及処難方ト以テ借金夥者  
別トノ所御執ノ束馬方ト以テ大金銭借リ少トモ若者ト  
也人ノ大量乃者少ト調略ト治ト者ト以テ治ト以テ傷ト如何

子安侍所唯今大役ト為リ壁殿棟ノ中掃トモ取リ中  
ト以テトモ亦野邑株大馬ト私欲トモ言フト可思思之ハ今  
一五年中見結ハ可思思ト三日三夜是間殿中錢不  
退謀云ヤ故リ越中守殿ニ以テ株大馬ノ奢金招志自  
中以文是正御事ヲ決ト別トカニ指梅ト以テ係隼人  
是ノ株云云取上誓可見合那リ及迄引裁ト隼人ト以テ  
不後貞佐此者ト以テ

野邑奸謀久徳隼人と追退事

以亦野邑株大馬ト大奉以役ト可成度久徳隼人ト指立  
昔ノ代乗細ト以テ海ト以テ借ト使分取隼人と腹思  
心ハ彼ノ聲志石田條吉也我同役成ト以テ打果ト以テ  
以後ト意趣ト以テ心分取隼人ト以テ後指立ト以テ

立身沈黙々何れ謀略して集人多分起者よ後身しと内  
公よ工史兵衛近頃大要無数の世邑筆紙より及ぶる者  
時り越中ち殿も常々冬よ形ると露と好む事朝夕の料  
理小用の細りよ時と代志法令して當代志將軍家  
大よ殺生禁制殊り多類存野或ハ綱有と難成  
業名領もたゝ通外ありお綱由れも大起よ首也之京大  
坂の内よ大津乃所を諸名お綱由れ自由之露成誌  
易らと持来り然も虫版も安く自由形り是と丑ハ  
寺のよ密よ賣買此の事形り殊古も能知りく家集を  
人又是成者て仕之と大津よ出し並と大津の所人と伴る  
よ入と金限と後しと諸名と不殘業集の序り高成改て  
倉儲と此の通順は類奸人是一物謀略とこの事と諸方

尤よ露成買志め成しと業名領は此一羽成不賣け放り  
業名領南老ハ大起よ露成拂座りく一羽成甘と之所是不  
よ料理よ成越中ち殿毎のく事附け成り大津也人  
成出と諸方相成りくともよお綱然也よ野邑殊古も  
露と一羽指古古名此見事形露隨下新成名形り越  
中守殿大起形の振成よては同類りよ為求るよ不お綱然  
くも又是仕きりと詳か大事りて物夕云るよ所酒の  
度毎よ野邑成は言出示常く此言も殊古も是君成不  
事は常あり我成り然役人よ中付又是此はよ宗綱  
然ふ殊古も綱へて上成常く言よ此陣畧成ありあ那  
がら露成一羽と左記悦成も非とん唯其志と感するよ  
首尾十分には言同成あり在上形り千石なり之徳集人

ハ家老の加判も此れは事心度なり所爲も只の如く加判して  
爲と御由是より爲り多終ハ如何も志く爲と御指  
上度多し又是正後とも中々明らりも又御叶其又是  
り偏くく或見解しと集人反多同役あり爲可なり  
上と又是正御見原仕るハ本主向らん我亦方より  
又是仕り可進亦と申送る多野色律世ハ計畧きくみ  
若程久徳集人其自信乃忠士救誠と思われ凡も野色  
り思惠此大悪多中く筆終し記し難事ともなり

久徳集人献上之露世色律古志を事

久徳集人其自信の人とて野色律古志の方より露と御  
可考同献上之露と御事と申其りしと此れ御心常と不  
實此人と思ふハ御由是より人心度と悦びて御入々条御

御下向しと一向に御心時節と考時も御心十月十七日  
此朝夜念因實此の時方り律古志の方より集人方は  
上方より通しと御心御唯今露利耳通分見事新古志  
と指越寺利集人大此は悦と御心律古志方心入を此由  
後難中より悦と御心夜念のりと御心露日此出願は  
彼露と御心登城しと御心御頭と御心御露指上  
寺り越中守殿様と御心御心仕寺り尚世同御心露  
我を不自也と御心と御心御心御心御心御心御心  
之向不出寺り御心御心御心御心御心御心御心御心  
おし御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心  
此露多御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心  
集人御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心

登城故跡を備へ不意千番と大死し痛解却し迎習頭  
とも上程く披露仕りた迄不意とあれりしと申す也馬中  
ハ揚々迎比有る事先高友ハ何と心得候ふ外大荒  
と成透ハ東照宮此所舎より之所不周懐古教を相續  
隠岐古様々と大同元年の家筋あり所一類所門葉は連り  
孫ハ能合介柳の所大名ハ各別高友ハ今十七日ハ大事  
此所精進東照宮の由忌日あり然り今も露と指上  
侍披露は少人我指上る人も偏は夢の如成候なり拙者逢  
く登城故跡の之細法有り申すも此少菊人柳次法を  
如柳の疾調少苦也此後日之所答難申拙者及ハ柳  
目通指相遠急申す意なれどもた柳は申す之ハ隼人友  
とさみよ柳をれハ唯急病腹痛と申断沙急とて教入

中と即時に帰宿せり遊身并古事とて此は急病と申す  
亦迎習頭も其後居難くと思ふと高友彼是言ふ人  
病氣と云ふと書し野色引也故は不及是非久徳隼  
人何の心と不付と云命のそと所也越中守殿此後内  
より委細申す座殊外不機嫌もと腹部半病と云ふ  
今ハ東照宮の忌日久徳隼人役人の身と志く不意  
不細法たと我失念もた年老る事其為の役人  
然お針屋の処ハ此の外兼束のあり急夜因門可仕也  
中野色并古事同役なり遊身と登城と候我機  
嫌と恐りて病氣と云ふ引也と云ふ少も不意不意の事  
なり唯と疑出と可お節其不迎習も不苦皆と云ふ  
お節と云ふととお解と久徳隼人一人の病度と云ふ即

時帰着稱く内門は女より多しと傳奸の事終云して一  
兵の語りと有る傳人如法なる類は律法馬折曲道順て  
恐奸人なり

久徳傳人切腹の事

傳人の智略の備は者別一同より野村律法馬常く秋  
律法相公律女野郎と大きき好り此故は京役者の伊勢  
山田よ来り居る名屋長四郎と道介役者と呼んく常く  
伽うく地ま縁と有る家中法士役人と吉村と姑とく  
久徳之松其介の西く生写（ニニヤ）は似せく或は淫声色は其後  
似せり是と慰と有る唯時の在與とのこと思ふは案の介  
大きに内心よ深き云々の事し 去程よ野村律法馬月  
没傳人内門志く疎よはまよまよの一人と有る岩所は派

遊山松真三裏の松物越中守殿乃重前も増りくり示  
久徳傳人の随分叶等なる人うく主人と尊み忠と表（ケミ）  
と内門慎み居り家中悪人尋ねる人を解く不自也子  
万有の時よ取よ入野村律法馬方より密よ見也の使言  
物極と想よ中送る所前（ケミ）の義は随分可松極小取成中と  
此化念毎夜く老伝はる室や世の中よ憂よ連立友と  
有く律法馬心慮込道分千万と知の伝実なる人と我  
常く疑ひ傳人の始よ思へり傳人を今ハ万場律法馬と我  
む或時車井戸力破りの不穴あり見方不定内門の内左  
法うの不定然まとも日利不叶事なり是ハ如何可仕やと律法  
馬方ハ教入地村叶く相幸の事と内心よ謀略と思ひ其  
後ハ其許に前くを放る時ハ後日ハ伏罪成中なり

是合拙者方より夜半より人可進其間を同の合品  
より物籠と送り扱夜陰より越中守殿所出と云つ越中守  
殿ハ帯に酒壺長き我徒の人より夜更酒壺より所出  
の潮入りと迫ちの堀の中と通り慰まる今晚亦所出  
より極りより并た馬と所酒此相伴より所供より出りとの  
時音と毒之今晚大工二人足籠と付より集人方より  
今晚指し扱し所出より一と云頂より入籠より職人  
より中付少も憚るを云くと梅と云く大工の方々の戸板  
より針ゆりといふと云法より云く集人とも如何と思へ  
とも并た馬の指越より上ハ別系より扱と密より内籠より  
之月越中守殿船より取り扱より被普請の志と云治り  
と夜中より難り登坂と為治り集人登坂扱より面より所出

事より集り其時野是然た馬より云ハ集人後ハ貞伝よ  
之殿板の所末と扱り快治く普請仕事杯ハ登不仕  
夜中より仕り神妙の者より私同彼之席と云く所出より  
上とも并た馬より下扱りと扱と云く大悪人寝好し然云  
以より越中守殿不扱治り夜中より岡門の内  
仕事不扱治り船ハ所敷より入ると云く相寄の事なる  
ハ新田治り酒壺言吐り云く云く登ハ岡門より夜  
と云ふ事有り命と云くこの岡門末年迄と云れり  
あもたらし一員なりと云く実や安樂世界と田村の瑞龍  
久徳集人より云く少と不遠是ハ彼を金元甲御相志似  
の名人より遠く如也越中守殿一云と云く志く所敷より  
入聖躬より各村亦た馬久松より久徳武部服治

半虎と名く之使集人及存の外卒忽者に其身は  
是可有之切腹可中付と書付より近比不及是兆天  
晴野色殊大馬の奸曲古今よそ之く大悪人の即的集人  
吉村亦大馬の方の強呼所書付と中後比集人を畏五  
十よ及く不綱法と是不中しゆる存尚中事も是に  
不及中分末と私無懸依の知事可中と四十九歳より切  
腹お果より難然家筋各家の者も八八歳の悴武十  
一十枚後家二十人技持言二十人技持言下集人兄久徳  
武部よ御願ケ引九世金巻大なる地九茶より普徳も  
結核有り野村殊大馬よ一平外移るとも作事二名  
書院廣間新發急造作甚不奥居同堂の如く長屋立  
けけ切も花繁葉名一番の大普徳一人役よ誰人と

猶ほく者と似く介柄内院方と皆殊大馬の下知と後より近  
比近代宿の下代有り一叔立身出世有物ハ不思候乃者也  
其上よ是近ハ足將小組と十人組より是よ集人足將武  
十人組より二十人組より大勢より是ハ葉名より一初日  
の出入野村奢も亦日く增長有り

野村殊大馬の大奉りよ故事

野村殊大馬の今ハ誰一人押ゆり人と是之亦代小法是初め叱  
り者大正家中一等よ野村具員よあり久松吉村ハ病氣と  
辭く不出會久徳武部ハ集人兄方故よ遍塞版部本虎  
一人幸若也此故よ野色殊大馬の二百名の加増致合千石  
有り家老末虎ハ加判可仕中ハ亦一五日ありと新渡大奉  
り役よ中付より所有り立方郡より勘定頭諸役人の



頭并古馬一人役ニ寄付多クは古下を伴古馬ノ諸願成就  
ナリ存ハ家老の次より國元仕並の事此と吟味侍心  
任より可仕迎年御不勝心ノ事ナレハ相付クこの義專要  
有り小役古馬並古馬ノ相改可付との事此世時より  
家中所中在申大目と付少所ノ政方々人とは見結  
り小家中より後成の嘉地日録汚着夥し返存ハ不様  
明り不実多クとて不様中細く役人納り御おり有り  
嘉信重く難成極よ又日あると廣大に録と携き餅一重  
片目録の金子宛初中後より一倍家中不様死り返礼志  
く役目より存ハ同中より寄地通路ハ仕同表と取中法  
人乃公と有り備所中如き所存りの足燈目心取出て名色不  
法と集め所合不中ハ法は是度大寺の寺人役より法行条出

入事取事新事より所指滞り少限全夜ア中其下外より私り  
より此北屋敷に業高事其月ハ嘉信者一色も指条其月又  
出入の町人方是迎り通出入可仕備所中の法はハ名色大寺合  
所内ノ宿老古終仕如きと孫子能知より可仕ハ若指滞事ハ  
可指出旅人性且舟路の法は難義不仕極よ可ハ法は法所  
事さると中法又在申ハ大庄屋小庄屋不仕る者多く是  
迄の如く相勅法法を不様指条持一遍耕作情出城付の身  
卒働人足五分通指条ハ之記より悦へり

野邑律古馬奢之事

野邑ハ大奉り寺人役家老の加判千貳百石諸方兼役如  
きれハ法は法も此任より取捌定初多家中贈も如き  
然り迎年ハ難よ憐れ方もかく大身より八月並り言

物と名附私儲は珍物と送る又我々方々を氣に懸くは  
人々を金銀と方々貸せたるも家中此徳士物女の所  
り年々額のはゆる下は附人々も年々此物減り或  
て首領りも此物減り合能故り家中此物減り或  
伴古馬が被宿此物減り難き人も皆むる人も分りり  
伴古馬の婦子言物二男高女も皆結核減り極まり  
頭の所上り出席するは越中中敷此流と云故り家  
才も是れは不及唯々羨む者も野色事表故り  
馬も三匹繋く侍十<sup>五</sup>人有り其不諸國より其諸浪人  
數十人私宿りかくまひ中向大帳簿の方女も数多前後  
百餘人家内無昌大帳の私欲も是れ後事も非はる  
と天道忍し記事なり

伴古馬の百姓在之居在借金銀取与事

野色如新農者なり分れとも是れ大悪此公とも出た志れ  
とも金銀湯水此とくは此出は極り是れ大酒好色料理  
好き遊山千貳百石を飯米薪の料程なりては分れり  
此り常とて五万石程の暮し如く大金り取附ては此物も  
成難しと云吏して其分りあり百姓共是年首領なり  
越中守殿へ上りは五年以前より五千兩指上ケは利金八  
彼是利も加へて五千兩指上ケは利金八  
千五百兩合て二千五百兩元金一萬兩是は百姓とも  
りは均と所は海より及志り百姓とも懐ひ又此所者  
且成は条は借金子授は極り又所金此又是年此自中  
も減りりと又此仕方も可なりは既近年私大奉りり

白真蛤の運上其不細細氷繩地引小標の真漢二十方  
一此運上又此年舟賃乃加減傳言割合所り金山方より  
開港仕り此新田四千余石何り五千石余の出目有る依  
け此方取入建此を百姓共の居屋敷年貢ハ式千石計の  
事一萬兩乃不利大方貳万石及中下方年貢所敷免此  
時此順路表所政法百姓共多難世間の唱、能此方  
を貳万石の御借金扱ケりる、一此と云々と上向何  
と申し利乃尙金よりく相寄り越中寺殿に寄る何物  
下此事あり宜仕り此に近近年没所出、此大馬方の  
諸侍に附ケきり島之郡を以代官、普徳作事らん  
と書不き、此大馬の家来同家の下、唯是人は非我云  
ん、此の家老服部半蔵を以年より吉村之松久徳を

病身ありと不出金五拾と人と云、此小諸地方諸侍人、此  
十五、此大馬、此大馬、此大馬、此大馬、此大馬、此大馬、  
是而、此大馬、此大馬、此大馬、此大馬、此大馬、此大馬、  
事、此大馬、此大馬、此大馬、此大馬、此大馬、此大馬、  
在、此大馬、此大馬、此大馬、此大馬、此大馬、此大馬、  
、此大馬、此大馬、此大馬、此大馬、此大馬、此大馬、  
り、此大馬、此大馬、此大馬、此大馬、此大馬、此大馬、  
ハ、此大馬、此大馬、此大馬、此大馬、此大馬、此大馬、  
年、此大馬、此大馬、此大馬、此大馬、此大馬、此大馬、  
、此大馬、此大馬、此大馬、此大馬、此大馬、此大馬、  
利、此大馬、此大馬、此大馬、此大馬、此大馬、此大馬、  
西、此大馬、此大馬、此大馬、此大馬、此大馬、此大馬、

惣と百姓永代意困窮難免なりは度所慈悲乃序并  
右為公入うと悉く免拜中込の條中後者悦ひいと  
此度こそ是成悦びと云ふ事ハ分記明り百姓た是は  
いふ事除さ此は成事ハ古今等々事こそ事ハ  
極のホ氣と村こ小餅と春日侍月仍仕て其悦ひ合事ハ  
分り分り五七十日もして今も是成事も忘れん成り  
世村を方順見りて出さ此は此れなりて世田村と東  
寺り先遊真乃茶屋と然りと表ハ世集の給茶屋内  
遣は俄り家ハ普徳後と是傾城金なり且金記と此  
りり大記ハ敏書昌と此れ此れなりて下成成所と此  
度とと普徳結梅なりと店も物好きと能成なり此不  
は大店金十三人小店金の内利賣るの口上と云ふ人成撰

り指人計皆と旅宿此振舞うとと隨分料理入急馳  
是後と酒の上とと并古鳥物終るる是後人の長命と  
危と物と此事とも我亦此後目ととと百姓為一命  
と捨るハ折りたされハ我今方永代為と百姓とも居  
扉下幸貞不強免免とと是ハ殿極の御慈悲と世上  
よ唱と百姓以末永代為の悦ひ水の上とと流ると思ひに  
此成身同後古村久松久徳大記と兼ひて是是兼  
ありと金記ハ野色并古鳥取り納めはとと此れなり松  
ありと記りも分記我亦と此れなり是も是も是も是も  
と百姓ともハ永代の事ハ此成ハ同後共此云も此に指結  
了る事我亦切後とと此れなりお極なり此希且終生害  
此時ハ百姓とも是取とと何是とも多み此れなり此

思ハハ是ハまず百姓永代志買上ヶ少ク金銀出々居  
屋敷永代志陰地子被きくらハ通能く人と思ハ九我  
等ガ口カク多ク事ト事ト大奸謀ト事ト事ト我の  
極ヨ物語あり大屋敷小屋敷ともありと是を逆順  
御志子等よ事存ハ何ガ借<sup>サテ</sup>百姓とも永代志居屋敷  
地を成能可お細ハ御難儀よ及中極よは仕居及ハ何  
事ハ御事なり是迄水分乃御御法等々殊ヨ所々人  
没大奉儀の度也御家老ト申身の上急立以才一  
存ハ扱ハ又百姓と永代地ナリ取ハ成事御同役中此所  
疑ハも可有事ニ願様乃思召も如何ハ借キ事ト云ハ一時  
此ノ如ク所身ナリ度事ナリ所ナリ條ハ地ト被官田村乃  
齊志一妻よ進み出々ハ少ク不約ハ者ヨ首儀也

とも野邑ウ持幣と後ク是兆よ不及一同ヨ昔小百姓  
成よ是迄と疎トテア中ノ事ト是地高河程ト云ハ積  
子成ハ力成干五百所の處随分下直ヨ積り下細の積  
りトテ多百姓共も不合忌成身ト抑平均ナリト是  
及代金貳兩平均ヨ積り見合<sup>是ハ上畑及ニテハ  
代金拾兩モスル所</sup>大概一萬  
五六千兩貳萬兩も及ハ可中合言ニ随分彼是一万取  
よテ御首尾此銘ハよ如ク中ハハハハ是可仕居去ハ金子  
尙分急リ難嗣ト云其時ト野邑中各代志分入海是  
在御屋上是我ハ相積事方ナリ各名是是連判の  
上を慥分ト事時ヨ日長村志事更方ヨ事ハ御事終ト  
仕居り也ト事積馳走ト是其上ハ是事更ハ諸方乃  
合帳ト積り利トト事取ナ御終御事ト村々名

共も惣百姓の連判より五年賦より返納の證文を  
貳千兩の金子湖十日計の用を相納す所は金子  
と清の納め奉名は海は遠望此内遊山及び言徳山  
田古市此在女屋西川屋より廿婦若敷十人呼寄り酒  
おひりりと奢り別世界此おとく奉名は歸建ハ越中守殿  
御懇在中より左儀なりと時服洋領をも宿より歸建ハ家  
申より莫言此言後彼を方貳千兩此金私欲自出り  
孝ふ後おとく大を初人の野色林古馬あり

町中坊銭帳人頭付抄し事

此村林古馬町中より中後当性集ハ天下此道より殊の  
外不造化乃上亦掃除も不奉無あり所家西ハ江際  
掃除も難成は方より役人とをて掃除可ヤ付其役

後家を初より各自三文宛出たへ〜と毎日大集又始十  
四日辰中間百姓役者より貳十人宛出せり是も十日  
程より八人にも出表並貳千軒裏家申す二残宛  
左集り毎日の割七貫五百文宛又性集舟を艘乃役  
残三十二文宛三貫文余亦旅人宿頭付より每晚人別  
と相改め宿屋より取人一人一残宛五人分結連  
より人々或ハ二残宛は此三貫文傳に合括四貫文宛毎  
日と律古馬方より納り皆酒肴の代り如く亦頃日  
本錦を端喜ると口采を後て村こより喜りり出る  
も喜りて銭もあともかたかり分儀私曲軒謀まらぬ如  
此儀人々古今未聞悪人あり

野色妍曲錄卷二終

